

| | |
|-------------|---|
| Title | <批評・紹介>今西春秋撰 校注異域録 |
| Author(s) | 若松, 寛 |
| Citation | 東洋史研究 (1965), 23(4): 515-521 |
| Issue Date | 1965-03-30 |
| URL | http://dx.doi.org/10.14989/152676 |
| Right | |
| Type | Journal Article |
| Textversion | publisher |

井田博士の指摘のとおり、資本主義と契約という用語についての宮崎博士の理解は、獨特のものであり、問題があるには相違ないのだけれども、その点をつくだけにおわっているのは、充分な批判とはならないと、筆者は考えている事を記しておきたい。つまり、宮崎博士の「近世論」は、土地問題や産業構造などの所謂經濟史的研究のみによって組み立てられているのではなく、全中國史に對する廣く且つ深い理解に支えられて、政治史・社會史・文化史・思想史などの諸分野を包含する、獨特の歴史論であつて、その一部をなすにすぎない經濟史的側面の、しかも、その用語に對する理解の誤りを指摘したとしても、それは、有効な批判とはなりえないのではないかと、筆者は考えている。そして筆者の理解するところを、參考のために記すならば、宮崎博士が、「資本主義」とか「資本主義的」とかという言葉を使用されるのは、嚴密な歴史學的・經濟學的概念としてというよりも、當時の中國社會が、發展度の低い、おくれた社會ではなかつた事、たとえば、當時のヨーロッパ社會などと比較して、はるかにすすんだ社會であつた事をいうための、一種のレトリックとしてである事が多いように思えるのであつて、宮崎博士も、宋代以後の中國社會を、産業革命以後のイギリス社會と同質のものとは、決して主張されていないはずである。その資本主義に對する概念規定が不明確であるから問題外というならともかくも、この論争が實り多い成果をおさめるためには、この點を理解するのが、必要な手續きであると考えるので、付記する事にした。

さて、以上によつて、筆者に課せられた書評の責めをふさぎたいと思うわけであるが、はじめに觸れたとおり、量的には三千二百頁をこえ、質的には高度の専門的記述を含む本書の内容を、正確に理

解し、これに對して感想を述べる事は、決して、容易ではない。筆者は、學友の協力によつて、この點、遺漏なきを期したつもりであるが、なお、萬全であるとはいひ難い。したがつて、本稿は、その理解について、多くの誤謬を含んでいるかも知れないし、二・三の論點を勝手にひきだし、これに氣儘な意見をつけ加えるという非禮を犯しているやもはかり難い。博士の寛恕を乞ふ次第である。

なお、本書については、第一冊「刑法」の刊行以來、多くの人々によつて、紹介と批評の文章が書れている。たとえば、宮崎市定（朝日ジャーナル・一九六二年一月二五號）、佐伯有一（社會經濟史學二八ノ四）、今堀誠二（史學雜誌六九ノ一・歴史學研究二五二・法制史研究一四・アジア研究一一ノ三）、旗田鸞（歴史學研究二三七）、利谷信義（法律時報三四ノ一二）などであるが、これらによつて、本稿の不備を補つていただければ幸いである。

（寺田隆信）

校注異域錄

今西春秋撰

昭和三十九年四月 天理大學おやさと研究所
B4判 三九八頁 附索引 地圖一葉

先頃、天理大學の今西春秋教授が右の如き大著を公刊せられた。

異域錄は、滿人トゥリシェン (Tulisea 圖麗琛 (圖理琛)) が、トゥルグート Tregut 土爾虎特のアユキ・ハン Ayuki Han 阿玉氣汗に忠誠賞褒の勅を傳うべき命を受けた中國使節團に加つて、康熙五一

年（一七一二）五月、北京を出立して、内外蒙古から更に路をロシア領のシベリア、ヨーロッパ方面にかつて、當時カスピ海の北方に住牧していたトゥルグートの汗庭に達し、命を果して五四年（一七一五）三月、北京に歸着するまでの間の旅行記を滿漢二體で認めたものである。本書は、滿文異域錄に對譯と、附するに二三九項に達する注解と、加うるに漢文異域錄との對校を施した非常な勞作である。

從來、異域錄の漢文本は廣く知られていたが、滿文本は今回始めてその原文が影印及びローマ字で發表せられた。筆者は數年前、教授の滿文異域錄の講讀に出席したことがあり、それ以來一刻も早く本書の上梓を希望していた。今回本書を手にして改めて當時のことをなつかしく想うと同時に、このような大著が世界の東洋學界に與えられたことを限りなく誇らしく思うものである。本書の東洋史學界のみならず、地理學界に與える功績は計りしれないものがあるが、さらにここに特筆大書すべきことは、本書によつて、全く未開拓ともいふべき、本邦のシベリア史研究の端緒が與えられたことである。從來親しみ難かつたシベリアの歴史や地理が急に親しみ易いようになった氣がする。教授の相も變らぬ開拓者的な學的情熱に深くうたれざるをえない。

本書の構成についていえば、羽田明博士の序文に次いで、例言、解題があり、解題においては、I 異域錄とその特性 II 版を重ねた漢文異域錄 III 稀本滿文異域錄 IV 新出の漢文異域錄（完結本異域錄） V 桂岩本異域錄の完結部 VI 異域錄の歐西譯本 VII トゥリシヤン略傳 附説：使節行の目的 が詳説されている。次いで本文として滿和對譯異域錄（上・下）と錢稻孫氏の手になるその中國譯が

收められてあり、以下、索引、あとがき、影印滿文異域錄、影印完結本漢文異域錄が附されてあり、さらに附録として圖麗探旅程總圖がついてゐる。

以下、内容紹介を兼ねつつ、若干氣のついた點などをのべていく。本書の主部は、例言Iにのべられているように、「滿漢異域錄の原典影印部と、これに對應する滿和對譯並びに注解である」。教授の滿和對譯が惡からうはずがない。ただ教授がいわれるように、「對譯和文は八合いて、永えたりVの如く文語表音方式によつた。これは滿洲語の文法構造が日本語の口語よりも文語に近く、また加圈點滿洲字が表音方式を案出したものである點に近似させることを考えたからである」（例言IV）とするのは、なるほどそうかもしれないが、われわれの世代にはこういう文體はどうもなじみ難い。現在日常用いられている言語で古體を表現することは困難ではあろうが、われわれにとつては、その方が讀むに樂であることを告白しておく。

滿文のローマ字化については、「滿文のローマ字化はメルンドルフの法によつた。但しメルンドルフの *u, k, g, h, c, y, s, z* などとするものは、私案によつてそれぞれ *u, k, g, h, c, i, dji, sz, z* などに改めた」（例言II）の如くである。この私案の大部分はすでに教授は東方學紀要I（一九五九年七月）において、*ハ* 滿語も音考V、及び*ハ* 滿語特殊字母の二三についてVと題して發表せられている。そのさいメルンドルフの特殊字母の後の四字母の中、*z* を除いてはメルンドルフに従うとされた。今回 *z* をも含めて、この四字母について新たな私案を得られた譯であるが、その訂正の根據を何らかの機會に發表せられんことを希望する。

次に解題の内容にふれば、解題Ⅰにおいては、異域録が「當時としては稀に見る具體的・科學的な體例で以つて記述したものである」(七頁)ことを力説しておられる。解題Ⅱには、異域録の二種の漢文原刊本と四庫本その他による漢文本の版本についての要領よい解題がのべられている。解題Ⅲには、滿文本の稀な所以と滿文本が漢文本に勝る所以―そのもつとも顯著な點は、滿文本は漢文本にない著者トゥリシエン自らの序文と奏請を具えている點にある―をのべ、しかしながら、滿文本にもその刷刻が著者の匆忙の間になつたために、粗漏があることが指摘されている。解題Ⅳには、滿漢異域録の末簡には殘脱があり、その殘脱部分數千字を補完する桂岩本なる新出の漢文異域録〔完結本異域録〕を紹介され、その完結部の構成にふれられている。解題Ⅴには、三部からなる完結部の内容が詳説されている。また完結録については、本項の末尾に、「完結録の漢文に對して滿文があつたかどうかであるが、本來の奏文としてはもちろんあつたに違いないものである。しかしそれは今日ではもはや尋ねるに由ないものであらう」(二〇頁)とされている。

なお著者は「ジュンガル貿易の問題を扱んだロ・シ交渉史上の新材料は、今日ソ連側からも中國側からも續々と見出されていると聞く。トゥリシエンに關する問題も、これらの資料の中で明確に彫り上げられるであろうことを、トゥリシエンの愛好者である筆者は切に期待している」(二〇頁)とのおべおられる。最近モスクワから出版されたズラトキン И. Я. Златкин 氏の「ジュンガル汗國史 История Джунгарского ханства, Москва, 1964.」はその期待に一部こたえるものであらう。例えば、完結録の第一の部分に限つていえば、露使イズマイロフとトゥリシエンとのやりとりの中

に、「一七二〇年の十一月の初めに、當時セレンギンスクから五〇キロのモンゴル領にいたイズマイロフに向つて、トゥリシエンは、
 △清軍はジュンガルに大勝利を得、若干の町を占領した。ツェワン・アラブタンから北京に謝罪と和平の使者が來た▽と傳えた。さらにトゥリシエンは、△皇帝はロシア使節にジュンガルから來た使節に會つて、清廷とロシア政府は一致して行動するのだから、ツェワン・アラブタンの敵對行為は無益であることをかれらに説明してやることを希望しておられる▽と告げた」(Златкин, стр. 350)ということである。教授の引用されたベルによれば、「イズマイロフ一行は十一月五日張家口で再びトゥリシエンに迎えられたこと」だけがのべられている(一八頁)。セレンギンスクから五〇キロの地點と張家口とは全く一致しないから、ズラトキン氏か、ベルかのどちらかがイズマイロフとトゥリシエンの會見の地點について間違つてゐるはずである。しかしこれは恐らくズラトキン氏の間違ひであらう。この後のイズマイロフの報告によれば、それは明かに長城周辺の都市でなければならぬ(Златкин, стр. 350)。いずれにしても、ロシア史料によつてトゥリシエンの行動は今後さらに明かにされていくであらう。なおズラトキン氏によれば、イズマイロフはこの申出を拒絶したために、トゥリシエンの怒をかつて、その地に引留められたあげく、糧食補給を拒絶され、その△町▽から出發して北京に向つたのが同月の十二日のことであつたという(Златкин, стр. 350)。

なお完結録の第一と第二にみえる、イルティシユ河上流地方のヤミチュフ(一七、一九頁)は、いずれもヤミシユフの誤りであらう。この地方の中心をなすヤミシユフ湖はすでに一七世紀前半から

鹽湖として、シベリア史に著名である。

解題Ⅵには、主としてカーエンのハロ・シ交渉史Ⅴによつて、異域録の歐西語譯本の存在が指摘されている。それらの中、著者が直接参照されたのは、スタウンソンの漢文本からの全譯英譯本（一八二一年）と、漢文本の部分譯であるゴービルの佛譯本からのミューラーの獨譯本（一七六〇年）であつたという。なお滿文本を全譯したものに、ロッキンのロシア譯本（一七六四年）と、レオンチェフのロシア譯本（一七八二年）の存在が知られているとのことである。なお本書にレオンチフ（二一、二三頁）となつてゐるのは、明かにレオンチェフの誤植である。レオンチェフは一七四三年、第三次北京傳道隊に加つて中國に派遣されたことがあり、後にロシア有数の支那學者となつた人物である。（かれについては、スカチュコフ「ロシアにおける支那語及び滿洲語の最初の教師」『東洋學の諸問題』一九六〇年第三號を参照したい）。その外に著者が注解において参照されたものに、ミューラーのハロシア史集成Ⅴ第四卷に收められている、トゥリシェン等に對するロシア護衛團の一人であつたスエーデン人シュニッチャーの記録、一七一九—一八二一年にかけてのロシア使節イズマイロフの北京旅行に加つた英人ベルの旅行記録、それにタイムコフスキーのハ蒙古橫斷中國行紀Ⅴなどがある。解題Ⅶには、トゥリシェンの生立ち、トゥルグート行と異域錄述作の功、トゥルグート行歸來後の動きと晩年、さらに附説として、使節行の目的がのべられている。その目的については、カーエンがいうようなトゥルグートに對する東歸勸誘の密命を帯びたものとする説を否定され、「トゥルグートの懷柔強化と併せて「あるいはそれにもまして」ロシアの國情探查を目的としたものであるとして十分

である」（二一九頁）と結論づけておられる。

以上の如き七項にわたる解題が二三頁を占めてゐる。この後、以上の解題の英譯にひきつづき、本文が掲げられている。以下本文中で氣づいた點を若干記してみたい。

注解一九、土爾虎特國の項で、シュニッチャーの記に *Мамай* といふと稱するタタールの汗の治績が引かれてゐるが（五六頁）、これはロシア古代文學に有名なママイ戰記を引いたものであらう。ママイがイワン・ワシーリヴィチ大公と戰つて敗死したのは、一三八〇年と比定されてゐる。なおこの戰記は、一六世紀中頃集大成されたものと推定されてゐる。

注解二一、*Kamissar* の項で、カーエンの記に、トゥリシェン一行が出發しようとするとき、北京にロシア商人フジャコフがいたので、中國はこの好機會を掴んで、トゥルグート派遣使節のためにロシア國內を通行する許可を求める旨のシベリア總督ガガーリン宛の書簡を一七二二年六月九日、かれに託したことがのべられている（五八頁）。この書簡を受取つたガガーリンの政府（より正しくは外務參議會）宛の報告と、かれ宛の返訓の内容は、ほぼカーエンにある通りであるが（七八頁）、ただカーエンのいう所によれば、返訓に、ガガーリンは、中國使節一行に、アユキと反ツェワンの策謀などは決してしないように言わなければならない、とあつたというが、いまその返訓の原文をみると（この返訓は一七二二年六月二六日附で元老院から出されている）、「使節一行が、もしアユキにツェワンを攻めよう口説いたならば、ツェワンはロシアの友邦であるから、かれを攻めてはならないことをアユキに言わなければならない」とある（Этаткин, стр. 339）。

注解一七にみえるロシア使節 Nicolas Gavrilovich Spatar(六〇頁)は、正しくは Nicolai Gavrilovich Spahary である(かれの名 Nicolai は、この項に引用された聖祖實錄にも正しく尼果頼と書いてある)。かれはベロボンネソス半島出身のギリシア系の人物であるから、もちろん「スパーター」という読み方自体も具合が悪い。

注解一九、満語 banjire について、「banjire のままでも強いて解すれば八生くる者、即ち八富者」ということになるのかもしれないが、字形が似ているところから、bayaqa 八富めるを誤つたものと見るべきである(六一頁)としておられるが、清文彙書をみると、banjimbī にも「家道殷實」なる譯語があててあるから、このままでも讀めるのではないか。

本文「我等が今のチャガン汗は、子供の頃に、諸々の子供等と共に戦戲をなすに興じたりき。今彼と共に遊びし子等みな將軍となりたり」(一〇八頁)の一節は、ピョートル大帝の諸業績の最初のものとして、またかれの生立ちを知るものとしてきわめて興味深い。ピョートルは少年時代、自分の遊戲のために、鷹匠、馬丁、番人、厩番などからなる同志の一團をかり集め、これに本物の騎銃や、連隊旗や、斧鉞などを持たせて、本格的に訓練しはじめた。遊戲はいろいろな軍事部門を取入れて、年とともに成長し、複雑化していった。やがて三百人編成の二個大隊がつくられ、それはクレムリの迷惑をはばかつて、遊戲隊と名づけられた。一六九〇年代になつて、遊戲隊の大隊が正規の二個連隊に發展し、それぞれ駐屯していた村の名をとつて、ブレオブラジエンスキー連隊と、セミョーフ連隊と呼ばれるようになった。後にこの兩連隊はピョートル大帝

の近衛連隊として、またロシア陸軍の根幹として、ヨーロッパにその無敵を誇つたものである。遊戲隊出身者の中から、後に大元帥にまで出世したアレクサンドル・ダニロヴィチ・メニンシコフ(一六七三—一七二九、後の商業參議會の議長イ・イ・ブトゥルリン、後の元帥エム・エム・ゴリツィン公(一六七五—一七三〇))らが知られている。

ピョートルは、これらの人びとを、心から信頼できる家來と考え、暗緑色の制服をきせ、完全な武裝を與え、それぞれ佐官、尉官、下士官に任命して、毎日嚴格な訓練を施した。あるときは、近くを流れるヤウザ河畔に正規的方式に則つた堡壘を築かせ、それを攻城技術の粹をつくして攻圍、強襲させる訓練させている。當時、十二歳くらいであつたピョートル自身、本當の兵士として、このはげしい訓練に参加し、かれも鼓手からはじめて、兵士のすべての段階をつぎつぎに經驗しながら昇進していったという(阿部重雄「ピョートル大帝」東京。一九六〇。pp. 19-20)。

このようにピョートルの戰戲は、異域錄の傳えるように、單なる遊戲をこえた重大な意味を持つていたのである。

注解一二四、オロスの八省の項において、トゥリシェンのあげる八省の一つ、ヴォローネジ(Воронеж/Voronej)縣(Voronez と轉寫するのは正しくない)が、一七〇八年のピョートル大帝の置縣勅令にみえず、かわりにアゾフ縣がみえるところから「トゥリシェンの傳えた消息は彼のロシア旅行中のもので、一七一三—一七二四年頃のものはずである。トゥリシェンは上記勅令に見える Voronez 縣の代りに Veroneiz 縣を擧げており、この點一致しないが、し

かしトゥリシェンの傳える所は勅令發布數年後のことだから、この時にはこのように改められていたものに違ひなからう」(一一六頁)とのべておられる。この點について若干補足したい。

アゾフはロシアの黒海への突破口として、一六九九年にピョートル大帝の手によつてトルコから獲得されたものであるが、一七一一年のブルート遠征の失敗により、同年トルコに返還されることになつてしたが、これが實行されたのが、一七一三年のことである。この間一七一年にヴォローネジュ縣が加わり、全部で九縣であつたが、アゾフの返還後、アゾフ縣はヴォローネジュ縣に編入されて、八縣となつていたというのが事實である。

注解一七六、Haeal Bäs は不明となつてゐるが、これはアゼルバイジャン地方のトルコマン族の呼稱である Kizil Bäs ではなくらうか。

本文「(ロシアでは)西瓜種の如き小さき銀の錢を用う。三文に當る錢、十文に當る錢、五十文に當る錢、百文に當る銀の錢あり。銅もて造りし大錢も亦あり、小さき銀の錢と等しく用う」(一三三頁)との一節は、正しくロシアの貨幣單位を傳えている。すでにピョートル以前のロシアには錢とよばれた小額銀貨、カペイカと半カペイカが流通しており、それらはアルトゥン(三カペイカ)、ドリヴナ(一〇カペイカ)、ポルチンク(五〇カペイカ)、及びルーブリ(一〇〇カペイカ)という計算單位でつくられていたのである。トゥリシェンのいう文はもちろんカペイカに當る。なお銅貨が発行されはじめたのは、一七〇〇年以後のことである。

注解二一七、タラ Tara の項において、ベルが、タラ町はイルティシ・河の西方に住む Kasatsky-Orda と稱するタタールの急襲

に備えてゐると書いてゐる(一六八頁)。この Kasatsky-Orda は異域録の傳える 哈薩克と同一のものである。ロシア史料にみえる Kasatsky Orda である。なお本書の本文では Haeak 哈薩克を、コサック Kossak と表記し、五二頁の地圖ではハサックとしてゐる。中央アジア史家が通例カザフ、もしくはカザックとするところのものである。

注解二一四は、本文「タタール、バルバ Barbat なる者は、オロス、ツェワン・ラブタンに俱に貢を納む。コサック國 Haeak Gurun の者折々に來りて彼等を掠むと云う」(一七〇頁)に附されたもので、そこには「ベルは、Baraba 地帯はロシアから北京に到る路筋中最も盜賊の多い所である。しかしそれは住民によるものではなくて、カルムックの仕業である。彼等は Kontaysha (ツェワン・ラブタン)への貢物を盜りに來るのだと言つてゐる」(同頁)とある。バラバ地方の住民はすでに一七世紀前半からカルムックの壓迫を受けており、それ以來この住民の歸屬をめぐつてロシアとカルムックはしばしば相争つたものである。この問題はツェワン・アラブタンの時代に至つても解決しなかつたことは異域録の傳える通りである。ズラトキン氏の書によつて、この頃のロシアとジュンガル間に行われたバラバ問題の交渉をみると、一七一三年に、例のシベリア總督ガリーリンはツェワンのもとに使者チュレドフ M. Педов を派遣し、「ジュンガル汗はバラビンスク郷(バラバ人の村落—筆者)の住民からヤサクを徵收することをやめるべきである」と要求している。ツェワンはこれに對して、チュレドフに、「バラバの者は昔から我が汗の臣下である」と答えて、この要求を峻拒した一節がある(Знаткин, стр. 41)。

ともかくバラバがロシアとジュンガルの二重貢納者であつたことは事實である。ベルがいうように、バラバのツェワンへの貢物を、同じカルムックが盗りに來るといふのはありえないことではなからうが、しかしこれを以つて、カザーフがバラバの者を掠むという異域録の記事を輕視してしまつてはなるまい。ツェワンが一八世紀初頭以來しきりにカザーフを攻撃している事實は、すでに佐口透氏が明かにされている「一八一—一九世紀東トルキスタン社會史研究」(東京。一九六三。p.23)。この頃のカザーフに對するツェワンの一連の行動の原因の一つとして、カザーフのバラバからのヤサク掠取を算えてもいいであらう。いずれにしても、異域録の傳える所は事實とみたい。

限られた紙數も盡きたので、最後に本書全體を通じて氣のついた點をあげると、せつかくの大作に誤植のやや多きは遺憾である。例えば、一九頁の一九三二年は一七三二年の、一七一頁の一九二〇年は一七二〇年の、一八頁の十一月は六月の誤りであらう。一五二頁

の *Rorsaki* は *Korsaki* の誤りである。また六六—六七頁にかけては、ティムコフスキーが、ティモコフスキーになつたり、ティムコフスキーになつたりしている。なお附録の地圖において、イルティシュ河の位置が途中で消えてしまつていて不正確である。その他すでに若干指摘したように、ロシア名の表示において、原語を正しく傳えない場合が往々みられることは残念である。

以上は、本書を通讀してたまたま氣づいた點をあげただけで、批評としてはもちろん、紹介としてもはなはだ不行届きなものであることは筆者自身十分に承知している。とくにいわずもがなと思われうなことをくたかく書いて書評の責めを塞いだことについては心苦しい限りである。著者の御寛恕をひたすら乞う次第である。本書が、我國の北方史のみならず、露支交渉史の、そしてまたシベリア史研究の不滅の金字塔であることは改めていうまでもない。本書に導かれて、この方面の研究者の輩出することを願つてやまない次第である。

(若松 寛)